

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大平 修也

題 目 芸術的行為による他者との共感的対話を通した生活世界の生成に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、協働造形行為の実践を越境し、人の生活そのものや互いに関わり合う多様な人々の関係を形成する芸術的行為の特性を明らかにすると共に、人々の生活、社会、文化を形成している経験の総体としての「生活世界」を新たに生成して、子どもの学びを中心とした生活、社会、文化の形成を目指す教育実践学の構築を目的とした。

各章において、文献調査、事例の参与観察記録や授業の開発実践記録に基づく記述分析を行った。西阪仰の「相互行為分析」と、大平修也・松本健義が行っている、ものや場を媒介とした視線、行為、発話、関係の変化の記述による子どもの見方、感じ方、ふるまい方、共感性や協働性の推移を可視化する画像分析を用いたトランスクリプトに基づき、事例を記述分析した。

序章では、研究の動機と意義、先行研究の検討、研究の目的、方法、構成を示した。

第Ⅰ章では、芸術的行為の過程で子どもが対話する他者の位置づけと研究モデルの構成を行った。佐藤公治やバフチン(Михаил Михайлович Бахтин)の「対話」、フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl)の「生活世界」から研究の視点を設定し、3つの参与観察事例を記述分析し考察した。①幼児が、展示作品を見ながら、他の幼児や保育士と語り合う活動を行った後に公園でドングリを拾い並べる造形活動を行った美術館での活動。②児童2名がカナヘビを飼育していた虫籠の中の環境をつくり変えた活動。③使われていなかった校内のビオトープをつくり変えた児童の活動。3つの事例の分析考察を通して、芸術的行為の過程で相互作用する3つの他者を位置付けた。(1)もの(素材や造形物)、道具、活動の環境、(2)共に活動する他の人や生物、(3)ものともものがもつ意味との関係、及び人同士や人と生き物の相互作用的なふるまいや関係としての社会文化的構成物。3つの他者と相互作用していく過程を共感的対話と位置付ける研究モデルを構成した。

第Ⅱ章では、ソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)の視点から、事例分析を通した研究モデルの検証を行い、芸術的行為がもつ芸術としての作用を明らかにした。文献調査により、人の社会文化的な相互行為を創造するSEAに関連した現代アート及び人の見方、感じ方、ふるまい方、表し方を

変化させる経験を示す「敵対性」(ラクラウ&ムフ(Ernesto Laclau & Chantal Mouffe))と、2つの異なる要素の関係をつなげたり切り離したりする作用を示す「節合」(ホール(Stuart Hall))の概念を研究の視点とし、2つの参与観察事例と授業開発実践を記述分析し考察した。①学生5名と児童1名が、流木などの漂流物を拾い組み合わせながら活動場所である海岸を協働でつくり変えていく演習。②直径5.5mの円形の紙に児童21名が協働で描いていった筆者の授業実践。①では、受講者がもの(素材や造形物)や他の受講者と相互作用していく「社会的相互行為」(エルゲラ(Pablo Helguera))の創造を含めたSEAに関連する現代芸術の11の性質や、SEAの特性である「敵対性」の作用により、互いの見方、感じ方、ふるまい方、表し方を共感的に味わう関係が、芸術的行為の過程で形成されることを明らかにした。②では、児童が制作過程で「生活世界」の一部として出会う他者の「敵対性」を経験しながら、自他を「節合」させて社会文化的な関係を形成していく芸術の作用が芸術的行為にあることを示した。

第Ⅲ章では、他者との共感的対話を生成する芸術的行為の授業実践を行い、多様な人たちの「生活世界」を新たに生成することで、第Ⅰ章で設定した研究モデルを修正し、その検証を行った。個々の人を示す「有機体」と、人が経験する対象を示す「環界」とが相互作用していく「主体」の生成過程としての「ゲシュタルトクライス」(ヴァイツゼッカー(Viktor von Weizsäcker))の視点から研究モデルを修正すると共に、以下の授業を芸術的行為として開発実践し、記述分析と考察を行った。①高校生8名、大学生1名、I美術館の館長1名の計10名が、アルミ合金製の丸棒を金鋸で叩く造形行為を行った後、つくった造形物に触れながら、叩いた経験について語り合った筆者の授業実践。②I美術館に展示した高校生ら10名の造形物を来館者が鑑賞した活動。

事例の分析考察を通して、「有機体」としての子どもと、「環界」としての他者とが出会う共感的対話の過程には、子どもが周囲の人と共にもの(素材や造形物)をつくり変えていきながら、もの(素材や造形物)に関わる身体経験を通じた地域の人々とのつながりを新たな生活、社会、文化として形成していく作用があることを明らかにした。これにより、研究モデルを検証した。

終章では、研究成果をまとめ、教育実践学への貢献と研究の課題を示した。芸術的行為において、他者(もの(素材や造形物)、他の人や生物、社会文化的構成物)と共に協働する子どもたちは、行為の過程で味わう身体経験を相互に共有し、その身体経験に基づいた個々のふるまいや表し方や造形物を自らのよさとして見付けたりつくり出したりしながら、互いのよさを個々のかけがえのなさとして味わい共感する見方や感じ方を獲得していった。こうして形成された共感的関係は、本研究において、子どもと大人が学び合う、新たな生活、社会、文化として実践された。

以上から、芸術的行為による他者(もの(素材や造形物)、他の人や生物、社会文化的構成物)との共感的対話を通して、学校と地域のつながりを新たな人々の生活、社会、文化として形成し、子どもを中心とした多様な人々の「生活世界」を生成する教育実践学の在り方を構築し提示した。